

氏 名 塩崎 俊彦

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大乙第 257 号

学位授与の日付 平成 31年 3 月 22日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 俳文芸史攷

論文審査委員 主 査 教授 神作 研一
教授 入口 敦志
准教授 木越 俊介
名誉教授 藤田 真 関西大学
教授 佐藤 勝明 和洋女子大学

(様式3)

博士論文の要旨

氏名 塩崎俊彦

論文題目 俳文芸史攷

学位申請論文『俳文芸史攷』は、俳諧という文芸が、それを愉しむ人々の日々の営みと不可分なものであったという観点から、江戸時代の俳人の生活や生業と俳諧の関わり、形骸化した宗教的儀礼としての法楽・奉納と俳諧をめぐる問題、あるいは近代の新聞というメディアが俳句革新運動に果たした役割などについて論じるものである。

序章では近代における西欧文芸思潮の受容によって、文学が日常現実の世界から切り離されたことで、人の営みのなかで文芸を捉えることが困難になったことを述べる。次に、連歌俳諧の発生が、そもそも二人以上の個性による遊戯的な言葉のやりとりであったことから、コミュニケーションを円滑にするための方略として、挨拶性、機智性、即興性という特性を想定する。また、連歌俳諧がこうした特性を持つ文芸であるがゆえに、人の営みのなかで文芸の価値を考える必要があることを説いた。

第一章は初期俳諧を対象とする。

「貞室自筆『貞徳終焉記』について」は、貞徳の後継者をめぐる論争のなかでしばしば取り上げられる安原貞室の『貞徳終焉記』について、その存在が不明となっていた貞室自筆本が滋賀県の「夢望庵文庫」に所蔵されていたことを報告したものである。貞室自筆本には「貞徳終焉記」の標題はなく、本作が後世の俳人の「終焉記」とは異なる規範を持つこと、それは宗長の「宗祇終焉記」などと同様に、中世以来の文人の晩年を綴る散文の流れにあるものであったことを論じた。

「土地の名を詠むこと―松山玖也『東下り富士一見記』に即して」では、俳諧の紀行文の特徴を明らかにするために、松山玖也『東下り富士一見記』をはじめ近世初期の歌人らの<旅の記>を取り上げる。中世の連歌師が必要に迫られて旅をするようになって以来、都にあって遠隔の地にある歌枕を和歌に詠むことと、実際に彼の地に赴いてその現実を目の当りにすることの齟齬が、<旅の記>を変質させていったこと、また、そうした齟齬は『土左日記』以来、土地の名を和歌に詠むことそのものが、言語遊戯性の強い理知的なものであったことに由来するものであったことを論じた。こうした<旅の記>の性格が、松尾芭蕉の『おくのほそ道』をはじめとする近世の俳諧師の紀行文に繋がるものであったことを指摘する。

「万句興行から矢数俳諧へ―法楽／奉納の視点から」では、井原西鶴の『大句数』、『西鶴大矢数』をはじめとする談林期に盛行した矢数俳諧が、いずれもその背景に法楽／奉納という、宗教的な営みの側面を持っていた事実をもとに、西鶴が矢数俳諧で演じたパフォーマンスもまた、法楽／奉納に通じるものであったことを述べる。

第二章は芭蕉以降の俳諧を対象とする。

「服部土芳の生活と俳諧」では、芭蕉の高弟で『三冊子』の著者である服部土芳の武家としての生活と芭蕉顕彰の俳諧活動について概観する。さらに、伊賀市に寄託されている沖森文庫の俳書のうち、土芳らの句会の記録である『芳門句帖』をとりあげて、土芳による句会の実態を提示し、伊賀上野における俳諧が、武士と上層町人層のゆるやかな交流なかで続けられていたことを論じる。

「画師の生業と俳諧—明和三年の大火と蕪村の讃岐行」では、明和三年、与謝蕪村が唐突に讃岐へ下向したことの理由について検証した。俳諧を嗜んでいた金毘羅の上層町人層の有力者である菅暮牛邸が明和三年一月に類焼し、その改築に際しての調度を調えるために京都の画師である蕪村が選ばれた可能性を、金毘羅衆と京俳壇の繋がりなどから検討した。

第三章は、近代俳句、特に正岡子規が本格的に俳句革新運動を展開するまでの時期を対象とする。

「異相の文明開化—擬洋風と散切物と新題目」では、建築様式としての擬洋風、歌舞伎の散切物といった、西欧と日本の伝統がないまぜとなった明治初期の文化的特徴を明らかにし、旧派俳諧師が好んで詠んだ「新題目」が、これと同質のものであることを論じた。これに対して、正岡子規らの俳句革新運動は、西欧に対する「日本」を強く意識することで、開化日本にふさわしい新たな伝統の創造の一翼を担うようになったことを指摘する。

「海南新聞の俳句記事一斑—『ほととぎす』創刊前夜」では、新聞という新しいメディアが子規らの俳句革新運動に果たした役割について、松山の「海南新聞」の俳句欄の変遷をたどりつつ解明する。子規とは旧知の海南新聞記者柳原極堂らが、旧派が主導していた海南新聞の俳句欄を子規ら新派俳人の牙城としたこと、その過程で海南新聞の俳句欄の撰者を東京の子規に依頼し、多数の投稿俳句を東京の子規との間でやりとりしながら、それらを編集して紙面に載せていたことを跡付ける。こうした経験が、のちに子規と極堂によって、松山で新派の俳句雑誌『ほととぎす』を創刊することに繋がったものであることを論じた。

Results of the doctoral thesis screening

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 塩崎 俊彦

Title
論文題目 俳文芸史攷

俳文学史の研究はこれまで、芭蕉と蕪村を中心として行われてきた。特にこの30年余りは方法論としての俳壇研究が行き渡り、芭蕉や蕪村がどのような俳壇史的状况の中で生きていたのか、彼らを取り巻く時代相が解明されることによって、芭蕉や蕪村の動向が時代に即して具体的に判明したことは大きな収穫であった。と同時に、貞門や談林など群小俳人たちの伝記研究が進み、同じく精力的に進められてきた俳書研究と相俟って、俳文学史の研究は相当の進展を見せてきたと総括できる。他方、雲英末雄が切り拓いた俳諧一枚摺の研究や加藤定彦がほぼ独力で開拓した関東俳諧研究が引き金となって、俳諧のいわゆる文化史的研究が科学的に実践されるようになったことも注目される。

しかしながら、微に入り細を穿って精密な研究が個々に進められた結果、俳文学史全体を射程に入れてその展開と消長を長いレンジで捕捉することは逆に難しくなってしまった。

本学位請求論文は、そのような俳文学史全体に対する課題に正面から挑んだ、野心溢れる力作である。特定の時代や俳人に焦点を絞ってそこをひたすら掘り下げるというのではなく、江戸初期から明治に至る俳文学史全体に関する重要な問題点を解明してゆく方法を取り、従来の研究史で見落とされていたことどもを究明するという姿勢が一貫しているところに最大の特徴がある。「俳文芸史攷」なる少々大きな論文タイトルも、内容を正確に反映したものと見ることができる。

貞門の代表的な俳人である安原貞室（1610-73）に関する論考を巻頭に据え、松山玖也（1623-76）の『東下り富士一見記』（寛文4年成・柿衛文庫蔵）に即して俳諧の紀行文の様態を探り、西鶴の矢数俳諧（談林）の性格を法楽・奉納の視点に基づいて解析、さらに芭蕉（1644-94）の存在を強く意識しつつ伊賀蕉門の雄服部土芳（1657-1730）の日常に迫り、蕪村（1716-83）と関わらせながら讃岐金毘羅の俳諧史を辿るところまでがひと括り、後続の章では明治期の俳諧の〈ゆくえ〉と俳句の誕生（『ほととぎす』創刊前夜）に試探を入れて、江戸（古典）から明治（近代）への流れをフォローする。特に、明治の子規の運動の基底に古郷松山の海南新聞のありようを位置づけることで、いわゆる「旧派」との複雑な関係性を整理してみせた手際は秀逸と言うべきである。また、矢数俳諧を考察する中で、俳諧を和歌から派生したものとしてではなく、元来ことばと人が密接に有していた遊びとしての営みを俳諧として位置づける視座が獲得されているのは注目すべきことで、氏が俳諧を、営みという切り口によって動的に把握しようとしていることが改めて強く印象づけられる。

所収論文に沿って具体的に示す。

「貞室自筆「貞徳終焉記」について」は、該書誕生の経緯とその性格をめぐって、書誌的分析を踏まえ、「終焉」という語を手がかりに貞室の意図を読み取ったもの。該書が、遠く中世の「宗祇終焉記」（宗長作）に連なる系譜にあるとの指摘は注目される。

「土地の名を詠むこと」は、玖也の紀行を、『土左日記』以降の紀行文の展開の中に位置づけながら、地名を詠み込むということの本質的な意味を問い直したもので、論の基底に芭蕉の『おくのほそ道』が強く意識されているところに氏の深意を感じる。

「万句興行から矢数俳諧へ」は、副題に「法楽・奉納の観点から」とある通り、矢数俳諧が行われた空間（寺社）における「法楽」という点を重視し、そこから生まれた独特のエネルギーを想定しながら、矢数俳諧という「営み」のあり方を再考する。西鶴の俳諧研究に新たな視座を提示した、研究史的に見ても重要な論考である。

「服部土芳の生活と俳諧」は、伝記資料を博搜しながら、伊賀における蕉門の歴史を土芳を起点に跡づけていく。とりわけ、具体的な資料に即して世代ごとの「伊賀蕉門」の顔ぶれとその変遷を明らかにした点は高く評価される。

「画師の生業と俳諧」は、蕪村が明和3年（1766）に唐突に讃岐に下向した理由を探ったもので、画師としての蕪村の生業を具体的に検証する。金毘羅衆と京俳壇の繋がりを闡明し、蕪村の画業の意味に迫った好論である。

「異相の文明開化」は、子規の新しさがいかなる点にあったのかを、単に「写生」と説明して満足するのではなく、「写生」の真意とその意識がどのような時代相に求められるのかにまで論が及んでいる点に視野の広さを感じさせる。

「海南新聞の俳句記事一斑」は、新しいメディアのあり方に当時の人がどのように関与したのかという点に注目しながら『ほととぎす』創刊に至る道のりを跡づけたもので、松山俳句史の一齣を解明して興味深い。

個々の論考が、俳文学史におけるそれぞれの問題を解明するまさに珠玉の掌編とも呼ぶべき達成を示している一方で、一見いささか微弱とも見られかねないその各章の連関には、実は、「営みとしての俳諧」なる視点が明確に貫かれており、その点こそ本論文の大きな特徴だと言える。俳諧は、和歌（雅文学）とは異なる「俗文学」であり、それゆえに、それを愉しむ人びとの日々の営みと不可分であった。近代的な文学観によって、ややもすると捨象されてしまった俳諧の挨拶性・機智性・即興性に配慮し、人びとの営みのなかで俳諧の価値を究明しようとする氏の姿勢は、従来の、例えば、俳人の伝記研究を中心に据えて俳壇の動向を捕捉しようとする俳壇史的研究とも、作品の価値をできるだけ純粋に追究しようとする文学的研究とも大きく異なるものであり、高い独自性と研究手法としての有効性を認めることができる。

氏が、俳文学の「本質」を正面から見据えつつ、多様な俳文学史的課題に真摯に向き合ってきたその豊かな学問的背景が、論文全体に行き渡っていることも添記しておく。

如上、本論文は、深い洞察に基づいて、長い射程で俳諧の本質を解明しようと試みたものであり、豊かで高次の研究成果を示し得ていることから、わたくしども審査委員会は全会一致で、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内容を具備していると判断する次第である。